

# ミステリ読書案内

2023. 7. 2 発行元

第493号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

## 島田荘司「ローズマリーのあまき香り」

4月に講談社から島田荘司の新作『ローズマリーのあまき香り』が出た。7年ぶりの「御手洗潔シリーズ」の長編ということになる。長年待っていた作品。単行本で600ページを越す大作である。その内容は…。

### 1977年の密室事件

事の起こりは1977年のこと。『占星術殺人事件』の出版が1981年なので、それ以前の出来事という設定である。探偵役の御手洗潔が登場するのは物語の後半になってからで、事件が起きてから20年後のこととして書かれている。

ニューヨークの高層ビル。50階にある劇場で、主役を演じていたバレリーナのフランチェスカ・クレспанが頭を殴られた形で死亡しているのが発見された。その部屋は鍵が掛けられ、部屋の前には見張りの人が座っていたという。完全な密室殺人事件のように見える。

### 死亡した後一時間踊り続ける？

警察が調べてみると、どうやら死亡したのは第二幕と第三幕の間にある30分間の休憩時間のようなのだ。ところが、クレспанはその死後も舞台上に立ち、第三幕と第四幕を最後まで踊り終えているのだ。多くの人たちが見守る中で…。そんなことが現実でありうるのだろうか。関係者の証言が丁寧に書かれて

いる。そこが「本格もの」の真髓であり、読み手に「謎」を意識させる部分になっている。

途中から上演されたバレエ劇『スカボロウの祭り』という作品の内容が作中作の形で登場する。人間になろうとした白鳥の物語…。この部分がかかなりの分量を占めている。この辺が本書の読みどころなのだが、もう少し短くてもよいのでは…と想ったりもする。

### 歴史の中で翻弄される人生

物語の背景として出てくるのは第二次世界大戦の時のナチスの話。そしてユダヤ人の話。ユダヤ教からキリスト教、イスラム教…、日本人の起源の話…。どんだん話は大きく広がっていく。こういうところが島田荘司らしさである。出てくる日本人は御手洗潔のみ。全てに渡って国際的な舞台と内容展開。

結末についてここで触れるわけには行かないが、出だしの「不思議さ」からすると…。密室の解は…。ともあれ、こうして島田荘司の新作を手にすることができるのは有難い。本は厚くて重かった。

### 「御手洗潔シリーズ」

1. 占星術殺人事件
2. 斜め屋敷の犯罪
3. 御手洗潔の挨拶
4. 異邦の騎士
5. 御手洗潔のダンス
6. 暗闇坂の人喰いの木
7. 水晶のピラミッド
8. 眩暈
9. アトポス
10. 龍臥邸事件(上下)
11. 御手洗潔のメロディ
12. Pの密室
13. 最後のディナー
14. ハリウッド・サーティフィケート
15. ロシア幽霊軍艦事件
16. 魔神の遊戯
17. セント・ニコラスのダイヤモンドの靴
18. 上高地の切り裂きジャック
19. ネジ式ゼツキー
20. 龍臥邸幻想(上下)
21. 摩天楼の怪人
22. 溺れる人魚
23. UFO大通り
24. 犬坊里美の冒険
25. 最後の一球
26. リベルタスの寓話
27. 進々堂世界一周 追憶のカシュガル
28. 星籠の海(上下)
29. 屋上の道化たち
30. 御手洗潔の追憶
31. 名探偵傑作短編集 御手洗潔篇
32. 島居の密室 世界にただひとりのサンタクロース
33. ローズマリーのあまき香り

### 田丸雅智「憂鬱探偵」

2月にワニブックスから出た本。作者の田丸雅智という人はミステリ系の人ではなく、ショートショートから出発した人のように見受けられる。ただ、表紙に鳥打帽を被り、格子模様のコートを着た探偵の絵が書かれていたのでたまたま手に取っただけである。ショートショートは都筑道夫も結城昌治も赤川次郎も太田忠司も手掛けているので、その意味では期待をして読んだ。

「憂鬱探偵」は本人が名乗っているのではない。たまたま「憂鬱に思っていること」を相談してみたら調査してくれて、それが評判になったというもの。探偵の名前は西崎徹。アシスタントは花倉若菜。西崎は変な相談にイヤイヤながら応じるタイプ。依頼がなくて困っていたところへ若菜が引っ張って来た男の相談事が「電車に乗っていると足を踏まれて困る」というもの。調べてもしょしょうもないことだが…。そこから思いがけない展開に。ショートショートはよりは少し長め。「レストランに入ると自分の料理だけが遅れるのはなぜ」「ジャンケンでいつも負けるのはなぜ」「靴下がすぐ消えるのはなぜ」…。奇想天外な方向へと解釈を広げていくところが面白さか。「月曜日は気分が沈む」当たり前のことにSFばりの結末がつけてある。